



温もりを感じる街 ウインザー

篠崎ひまひ

「みなさまの左手にウインザー城が見えます」がロンドン、ヒースロー空港を離陸する際の定番機内アナウンスでした。女王旗がたなびいているときには、「女王さまあゝ」と心の中で手を振っていました。

イギリスの航空会社で過ごした三十七年間の内、最も頻繁に訪れていた街が、城下町ウインザーでした。ヒースロー空港付近に常宿があり、空港からバスで三十分。フライトの疲れを癒し、イギリスの四季を感じる温かい街です。

ウインザー城内のお庭の散歩をゆっくりしてから、テムズ川沿いに降りて、白鳥やカモとお・は・な・しー！ 今日の独りランチは Browns で白ワインと読書！

同僚とは Pub lunch やタイ料理が人気！

道行く地元の人々は、紳士の装いのおじいちゃまがおばあちゃまの手をひいてゆっくりと歩を進めます。燕尾服の制服を無造作に、元気にはしゃぐイートン校のボーイズ達に将来の政治家の姿が見えるようです。

みなさんが女王陛下のご近所さんで、スーパの冷めない親近感か、エレガントさが漂います。

夕暮れ時には、ホットチョコレートで暖まり、好きなチョコレート屋さんに立ち寄り、母へのお土産を一粒ずつ選んでいました。

二十代から還暦近くまで、楽しい語らいの時にも、独りで物思いにふけることもウインザーの街は、住民ではない私も温かく包んでくれました。先日久しぶりに訪れたときに手に取ったイベントガイドには、三月十五日女王様の九十歳のお誕生日のお祝いとあります。もう四十年以上も通っている街に、時の流れという新たな感慨深さを覚えました。

(1)のKono ひまひ

シカゴ エスニックな息吹を感じる街

小林洋哉

シカゴ (Chicago) の弁護士から届いた学生への褒め言葉が嬉しかった。二月初旬、米国第三位の大都市で Windy City ともいわれるシカゴの Dayne Kono 弁護士からのメールに、彼の法律事務所 MASUDA, FUNAI, EIPERT & MITCHELL, LTD. の机をかりてコミュニケーション等の勉強をさせてもらっている三年生の K さんについて次のようなコメントがあったからだ。For such a young person, she is quite mature and independent. I think she do well in whatever she decides to pursue. 即ち「K さんは若いのに大変大人で独立心があり、今後何を追いかけてもうまくやっていくだろうと。K さんは現在インドのタタグループと三菱商事の合弁会社(出資比率五一%・四九%)である日本タタ・コンサルタンシー・サービシズ(株)にも内定しているほどの学生なので褒められても当然かもしれないが……。

私は以前メーカールの駐在員としてシカゴにいたので、最良目・ほら吹き(Windy) とならないように風通しの良い(Windy) 公正なコメントをしなければならぬが、シカゴは米国のよさが凝縮されている街といえる。スチュアート・ダイベック (Stuart Dybeck) の短編集『シカゴ育ち』(The Coast of Chicago) の「冬のシモン」(“Chopin in Winter”)からは「冬の寒いシカゴで生活している若者の夢・希望や人々の息吹が伝わってくる。シカゴの現地ラジオからは、都会の喧騒、ミシガン湖畔のスカイスクレイパーな建築美、宝石をちりばめたような夜景、ジャズ・ブルースの音色(ブルースピアニストの有吉須美人さんも)、様々なエスニックタウンでの美味しい食事、そしてシカゴに住む人々の吐息も感じる。ちなみに、シカゴの車のナンバープレートに Land of Lincoln の文字が刻まれているのは、リンカーン大統領の故郷スプリングフィールド(Springfield) がイリノイ州都だから。シカゴからレンタカーに Interstate-55 経由で片道四時間のドライブの旅である。

(2)はやし ひろや



ウォーター・タワー前にて

調布 新しい人生を始める場所

加藤由香里

修士課程を修了してから、非常勤講師として留学生に日本語を教えはじめた。しかし、子供を産んで一年間の自主育児休暇を取ってからは、なかなか再就職先が見つからなかった。書類選考はなんとか通過しても、面接官とのやりとりになると、相手が私に興味をもっていないことが肌で感じられた。

しかし、よくよく面接官の話を聞くと、留学生の多くが理工系学部に所属しており、生活ではなく研究のための日本語を必要としているということだった。もし、理工系出身、例えば、工学系の学位があれば、研究室で留学生の置かれていた状況がわかり、専門教官のニーズに合った教育ができるだろうとひらめいた。もう、迷わなかった。四歳になった子供を保育園に預けて、自宅のある三鷹からバス一本で通える理工系大学の博士後期課程に進学した。

しかし、進学してから数ヶ月が過ぎるころ、急に後悔し始めた。研究室で与えられるのは基礎的な課題ばかりで、技術的なことは誰も教えてくれなかった。

そんな時、子供を育てながら研究する留学生と社会人学生の友人ができた。彼らは一人で研究できるテーマを選んで、自分で活動していた。決して、教授が指導してくれるのを待っているわけではなかった。そんな彼らの姿を見て、研究室にいれば自然に研究ができるようになるかと考えていた自分の甘さに気づき、恥ずかしくなった。

しかし、一日一日を生きているのが精一杯で、将来の希望という夢は何度も消えそうになった。途中で退学しようと考えたことも一度や二度ではなかった。苦しい中で、与えられたチャンスを生かすのも自分次第であること、成果を出して周りに理解されるまで時間がかかることを身をもって学んだ。今でも、昔の志を忘れそうになった時、この調布にある大学のキャンパスを一人で歩く。あの時の自分なら、今の私に何と声をかけるだろうか。

(かとう ゆかり)

元気をくれた街 ザルツブルク

大河まさ子



ホーエンザルツブルク城
(大河まさ子画)

高校一年の時、進路のことで悩み、また怪我で大好きな部活動にも参加出来ず暗く沈んでいたことがあった。そんな時友達から「この映画を観て元気出して！」と一枚のチケットをくれた。The Sound of Music のチケットだった。そしてその映画のオープニングで早速元気を貰った。画面いっぱい広がるアルプスの山と青空、空に向かい伸びやかに歌うヒロイン。心が広がり軽くなる気がし、その時から「いつかこの映画のロケ地ザルツブルクへ行こう！」が私の楽しみとなった。

それから三十年後やっとその夢を実現できた。映画の中でマリアが子どもたちと一緒に「ドレミの歌」を歌ったことで有名なミラベル宮殿の階段に立ち、青銅色の屋根を持つ大聖堂のドーム、そしてその上に聳えるホーエンザルツブルク城を眺めた時、「ザルツブルクに来たんだ！」としみじみ喜びをかみしめた。「この三十年間どれだけこの映画に元気を貰ったことだろう」、そんなことを思いながら大聖堂と城、そして美しい庭園の景色をしっかりと目に焼き付けた。

ザルツブルクは、緩やかに蛇行して流れるザルツアッハ川の両岸に開けた街であるが、その左岸は旧市街と呼ばれ、ミラベル宮殿から見た大聖堂や城のほかに噴水の美しいレジデント広場もあり馬車が走っていた。また映画に登場した祝祭劇場やノンベルク修道院等の歴史的建造物も多く立ち並び、ゆっくり時間をかけて見たい場所が多かった。さらに進むと中世から変わらない街並みがあり、その中のひとつゲトライデ通りには、店の入り口上方にその店で扱っている商品をかたどった鉄製の看板が掲げられ、それを見て歩くだけでも十分楽しむことができた。その通りに黄色い建物があったが、その四階でモーツァルトが誕生したことであった。

ザルツブルクを訪れたきっかけは映画であったが、アルプスの山の麓にある歴史的建造物の多い落ち着いた街という印象を受け、忘れたい街となった。

(おおかわ まい)

参加して楽しむ町 米国国内留学？

高土京子

米国バーモント州にあるミドルベリーという町は、リベラルアーツカレッジで学ぶ学生に加え、作家、芸術家が集まる穏やかで美しい田舎町であるが、夏の顔は異なる。

それは、六週間もしくは八週間かけて、中国語、フランス語、ドイツ語へブライ語、日本語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語の中の一言語を集世界的に学ぼうとする学生とそれらの言語を教える教員が全米、もしくは全世界から集まってくるからである。学生は入学時に、学習言語以外の言葉は使用しないという誓約書に署名し、その言語のみが使用される寮に住み、日中の長時間の教室学習に加え、夜には宿題をしたり、その言語で映画を見たり、各種行事に参加する。所謂トータルイマージョン方式での言語学習である。

もちろん、それらの言語が使用されている国や地域に留学することも言語習得や異文化適応能力の向上につながるわけだが、初心者等の場合、現地に行くよりもミドルベリーで学習した方が、急速に上達する可能性が高い。

その理由は、日本語を例に挙げると、そこに集まった経験豊富な日本語教師が、食事時間なども学生のレベルに合った日本語で話しかけてくれるし、当日学習した語彙や文法を使用して会話をしてくれるので、自分にとって適切なレベルのインプットが常に得られるからである。それに、学費、宿泊費、食費を合わせると二〇一六年の場合、八週間で一万一三三〇ドル(約一三〇万円)もの費用がかかるので、参加学生のモチベーションは高く、実際、私が一九九一年に受け持ったゼロ初級の学生の中には、二週目には、「うたら」を用いた条件文を使った会話をしたりする者もいた。学生の年齢は多様ではあるが、とにかく授業のペースは速いし、暗記することも多いので、記憶力に自信のない学生にとってはストレスも多い。ストレス解消のためか、単なる習慣なのかはわからないが、日本語以外の言語は使用しないと誓った学生でも、シャワールームでは英語の歌を大声で口ずさんでいた。二十五年前とは違い、スマホ全盛期の今日、学習言語以外に触れずに八週間を過ごす学生は少ないと思いき、ミドルベリーの夏季校のホームページを見てみたら、今でも入学生は「誓約書」にはサインするようである。

日本にもこんな町、こんな学校があったら、国内留学する学生も出てく
るのはないだろうか。

(たかし きょうこ)

ミラノの思い出 ベッラ・パンチャ

新居明子

「ケ ベッラ パンチャ(何てステキなお腹)！」
二〇〇六年夏、初めての出産を間近に控え、大きなお腹を揺らしながらミラノの街を歩いていた私は、地元イタリア人たちから何度もこの言葉をかけてもらった。私のお腹が特別「ステキな」形をしていたからではない。イタリアでは、「ベッラ パンチャ」は妊婦の大きなお腹を形容する慣用語なのである。

二〇〇五年から二〇一〇年までの五年間、私は夫の赴任に同行してミラノで専業主婦としての生活を送った。家族愛の強いイタリア人の子供好きは有名だが、彼らは妊婦に対してもとても親切である。優先席はなくともバスや地下鉄では必ず誰かが席を譲ってくれる。近所のパン屋さんでは「赤ちゃんの分よ」とコルネット(クロワッサン)をサービスしてくれる。行列に並んでいると、普段は隙あらば横入りする彼らが「あつちに椅子があるから座っていなさい」と声をかけてくれ、私の順番が来るまで見守っていてくれる。そして別れ際には必ず「ケ ベッラ パンチャ！」なのである。これまでの人生で、後にも先にもあれほどまでに注目され大事にされたことはないと思えるほどである。それまでは日本での多忙な日々とのんびりしたミラノ生活とのギャップになかなか馴染むことのできなかつた私は、この少し照れくさくなるような素敵な言葉「ベッラ パンチャ」に出会ったことをきっかけに、イタリアの文化や人々についてもっと知りたいと思うようになった。近所の人達との会話も弾むようになり、次第にイタリア人の友人が増え、毎日ますます楽しくなっていた。

ところどころ、女王様のようにちやほやされていたのは妊娠中の十月十日のみで、長男を出産した後は、「ケ ベッラ パンチャ！」は「ケ ベッロ！」という息子への賛辞に取って代わられてしまったのだが、その話はまた別の機会に譲りたい。

(にい あきこ)



2005年 ミラノ・ドゥオーモモ屋上にて

花の都パリは発掘現場

小山美沙子

パリの某古書店から届いたカタログの中に、偶然、女性用百科事典と思われる文献のタイトルを見つけた。それが全ての始まりだった。二十年以上も前のことである。取り寄せてみると、それは十九世紀末にパリで出版されたと考えられる女性用の実用百科事典であった。他にもあるかもしれない、調べてみたいと思うようになった。こうして、毎年夏休みを利用してパリの国立図書館通いが始まり、書庫の奥深くに埋もれている十八十九世紀の女性用の教養書やその関連図書の探索を続けることになったのである。

図書館の蔵書カタログや当時の出版報、出版カタログを手掛かりに文献のタイトルなどを突き止め、ひとつひとつ現物を確認していくのはなかなか骨の折れる作業であったが、発見の喜びは何物にも代え難かった。

ある時、いつものように文献を請求したところ、特別室に来るよう指示が出た。その部屋の指定席で待っていると、ページの切られていない仮綴じ本を係りの者が持ってきた。もちろん、自分でページを切ることもと許されない。そこで、部屋の女性担当者の所へ持って行き、ページを切って欲しいと頼むと、彼女はその本を手に取りながら、「あなたがこの本を二〇〇年の眠りから目覚めさせたのですね」とにっこりしながら言ったのである。

その後、文献発掘の現場は、ソルボンヌの図書館や国立教育研究所図書館、そして風情ある街並みの一角に佇む小さな古書店にまで広がっていた。国立図書館が全ての文献を所蔵しているとは限らないからである。事実、長い探求の末、古書店で感激の対面を果たした幻の書もあった。

昨日、私には夏休みにじつくり文献探索をする余裕もなく、加えて、花の都パリもテロの脅威にさらされている。リュックを背負ってセーヌ河岸の古本屋に何度も足を運び、足下を見て値段を吊り上げているとしか思えない恰幅のいい女店主相手に値切り交渉をしたことも、今となっては懐かしい思い出である。

(こやま みさ子)

異質なものにオープンな学生の町 アナバー

須賀藤隆

ご縁のあった印象深い町は多いのですが、私にとっては米国のオハイオ州コロンバスやコネチカット州イーストハンプトンがその範疇に入ります。先ず前者は、県教委勤務時代に「全米教育長協議会・年次総会」に招待され、当時の教育長と二人で出かけた町であります。その際、驚いたことの一つにレセプションがありました。それは近郊の農家を会場に行われましたが、何とそこには飛行場があり、農作業用飛行機を所有しているような驚くほど広い土地をもつ農家でありました。次に後者は、高校教員時代に研修としてコネチカット州の州都ハートフォード近郊の町に赴き、暫くの間、現地の高校で授業を担当したイーストハンプトンです。ホームステイ先の近隣には普段でも国旗を庭に掲げている愛国者が結構な割合で存在していて驚きました。

しかし、何といっても私にとって最も印象深いのは、ミシガン州のアナバーです。文部省からミシガン大学に派遣された当時、同大学は「英語研究所」の初代所長 Charles C. Fries の提唱した Audio-lingual Method (Oral Approach) の総本山として有名でした。今でも pattern practice 等は変貌を遂げながらも、なお有用な教授法の一つとして学校現場に生き残っています。当時の私はまだ若輩の三十代前半の一英語教員だったので、米国の経済的豊かさや、米国人の積極的且つオープンな性格などに大きな影響を受けました。週末の学内での学生のサークル活動の一つだったのでしようか、「琴」の音を耳にし、所謂部室と思われる一室のドアをノックし、突然の見学希望理由を述べたところ、返ってきた返事は No problem でした。この一言はその後私を米国好きにした原点であるように感じています。振り返れば、当時から幾星霜、あのミシガン大学はどのようになっているのだろうか。アナバーの町の学生や市民の気風は、四十年経った今でも引き続き異質なものに対して実直でオープンでフレンドリーだろうか。元気なうちに再訪してみたいと思うこの頃です。

(すが ふじたか)

ブリスベン 思い出の詰まった町

濱嶋 聡

クイーンズランド大学(QU)大学院留学中、現地のスカイダイビングクラブの初ジャンプで強風に煽られ、パラシュートの操縦を誤り池の土手で腰を強打、失神後池に落ちて水中で意識回復。腰椎圧迫骨折(第一腰椎陥没)のため立ち上がることができずに池の底を這って(匍匐前進)岸に辿り着き、王立ブリスベン病院へ運ばれる。医師から脊髄損傷を恐れ下半身不随にならなかったのは実に運がいいと言われ、退院後三か月間、肩から腰まで石膏で固めて授業に出席。石膏が重く、授業中何度も立ったり座ったりする許可を特別にいただく。当時、QUは、全学生の成績を州の新聞、The Courier-Mail(中日新聞の存在)に発表。私の指導教官は、変形生成文法の世界的大家、Rohrer Huddleston 博士(英国人)で、履修科目は博士が指定。その成績といえば、一般言語学、統語論、意味論、社会言語学等全て七段階評価中の四か五(可)。留学中は、オーストラリア人学生約一〇〇名、各国からの留学生約五〇名が住む寮生活。Peggy(呼び出し)の担当日、マイクがオンになっていたのに気付かず相棒のオーストラリア人学生とのアホ話が寮全体に筒抜けとなる。因みにこの原稿を書いているのも留学時代からの知人で皮膚癌の専門医をしているオーストラリア人の Morton Island にある別荘。他の友人たちとも互いの結婚式に参加したり三十年以上の家族付き合いを継続。シドニーオリンピックが開催された二〇〇〇年度は、前勤務大学より交換教授としてクイーンズランド工科大学(QUT)へ派遣され、大学院文化言語研究科、TESOLコース修士課程の科目を担当。入学資格の一つが、語学教師としての経験のため、院生や市内の英語教師、日本の高校でのALLTの経験があるオーストラリア人やカナダ人で、修了生の一人は、名古屋商科大学に常勤講師(三年間契約)として採用。最後に、私にとって

のブリスベンのイメージはジャカラダの紫色の花が咲き誇る美しい光景、一方、この季節は後期試験の季節でもあるためオーストラリア人学生たちにとってはまた違ったイメージ(かも)。
*持ち帰った種から育てたジャカラダとポトルブラシ(赤、黄金)をキャンパスに植えてもらったが、ジャカラダが紫の花をつけるにはまだ数年かかりそうだ。

(はましま さとし)



3か月ぶりにプラスターを外した日
王立ブリスベン病院

イギリス、ブライトンへの一人旅

ハンフリー恵子

私が初めて海外へ一人で行ったのは、大学時代のある夏のことだった。当時から作家ヘンリー・ジェイムズが好きだった私は、彼が生活の基盤としたイギリスに憧れを抱いており、まずはイギリス南東部にあるブライトンに行くことにした。

ブライトンは十八世紀より休養地として知られ、十九世紀に鉄道が敷かれると、ロンドンからも日帰りで訪れることのできる手頃なリゾート地となった。特に夏は観光客で賑わいを見せ、海水浴を楽しむだけでなく、ビーチ沿いの道や海に張り出したピア(棧橋)をのんびりと歩く人も多い。私もそんな観光客に混じって海岸沿いをぶらぶら歩きながら、小説や映画に描かれた世界をブライトンに重ね、まったりと街の空気を楽しんでいた。観光客が多いビーチには、もちろんフィッシュ・アンド・チップスがつきもの。揚げたての魚のフライとチップスが塩少々とピネガーをふりかけ、ピアにある遊園地を眺めながら海辺で食べれば、気分はすっかりイギリス人。

街の中心部には、十八世紀末にジョージ四世が離宮として完成させたロイヤル・パビリオンがあり、タマネギ型ドームが人目を引くその外観はインドの宮殿を思わせる。しかし一歩中に入ると、そこには中国風の装飾物で彩られた部屋が多くあり、なんとも不思議な異空間である。そんなパビリオン内にはカフェがあり、そこでティータイムを楽しむことができる。海外初体験の大学生が、かつての王族の離宮で紅茶をいただくだけ、まさに貴族にでもなったような夢心地。スコーンの割り方も知らず(普通は水平に割ります)、とにかくクロテッドクリームとジャムをたっぷり塗ってかぶりついたスコーンの味は、日本で味わうケーキとは全く違う格別なものだった。それから十数年後、もう一度ブライトンを訪れた。以前のままの街の空気に触れ、フィッシュ・アンド・チップスやパビリオンのカフェのスコーンを食べたとき、その変わらないすべてに懐かしさを感じた。その瞬間、ブライトンを私の「古巣」と図々しくも考えたのだった。

(はんふりー けいこ)



ロイヤル・パビリオン

ローマの「チルコ・マッシモ」

大橋保明

そこは、今、ただの広場である。ローマ市内の地下鉄チルコ・マッシモ駅からほど近いパラティノの丘（皇帝の居住区）から見下ろせる楕円形の広場がチルコ・マッシモ（Circo Massimo）、ラテン語名はキルクス・マクシムス（Circus Maximus）で最大の競技場を意味する。ローマに行ったことのない人でも、今なおアカデミー賞史上最多十一部門を受賞した作品であるウイリアム・ワイラー監督「ベン・ハー」（一九五九年）の撮影場所であると聞けばピンとくるかもしれない。特に、チャールトン・ヘストン演じるユダヤ人貴族出身のベン・ハーが幼なじみのローマ軍人メッサラと戦車競走で激闘するシーンは、CG全盛の現代からは想像もできない迫力ある名シーンである。

映画談義はさておき、二年ほど前にこのチルコ・マッシモを訪れる機会があった。これほど有名な場所なので、さぞかし観光客も多いだろうと思っていたが、地元の人も含めそこにいるのは私一人であった。古代ローマの戦車競技を想像しながら騎手の視点でコースをジョギングしたり、今は残っていない三〇万人収容の観客席から観客の視点で俯瞰したりしながら、半日ほど過ごしただろうか。一般の観光では考えられない過ごし方であったが、実は、私には別の目的があった。それは、学生時代に学んだ教職科目で、カリキュラム（curriculum）の語源がラテン語の「走る」を意味するクレール（course）にあり、古代ローマの戦車競技コースがイメージされていると聞いたことがあり、それを実際に見てみたいとずっと思ってきたのだ。

現代では競馬場のコースにも例えられ、決まったコース・距離を走らされるという運動性がカリキュラムの宿命とされるわけだが、多様化・複雑化する社会状況の中で改めて学習者の主体的な学びを促すカリキュラムとは何か、ということをも、ただの広場をポーと眺めながら考えたことを懐かしく思い出す。

（おおはし やすあき）



チルコ・マッシモの全景

ミレニアム・ブリッジ ロンドンつぼさ

鶴本花織

ミレニアム・ブリッジ



ロンドン市内を脈々と横断するテムズ川に小気味良く架かっている橋たちのうちで最も若いのがミレニアム・ブリッジである。人類史が二十一世紀に突入することを記念するにふさわしい実験的な建築術を用いたこの橋は二〇〇〇年六月一〇日に開通するも、三日後には急きょ閉鎖し、再開通するまでに結局一年半以上の期間を修繕工事に要した。実験的すぎて橋が揺らいでしまったせいである。

当時の私はロンドン大学博士号取得の最終関門である口頭試験を二か月に控えており、開通初日に橋を見物しに行くという呑気さは持ち合わせていなかった。ただ、橋を初日に訪れた歩行者たちがこぞって橋の淵に座り込み、橋をブランコのようにガシガシと揺らして喜ぶ姿をBBCニュースが伝えるのは観た。市民のでき心から公共事業の設計ミスが明るみに出るあたりがいかにロンドンっぽくて愉快だと思った。

二〇〇〇年の暮れにロンドンを去った私がミレニアム・ブリッジの初渡りを経験したのは二〇一二年夏のことだった。何気なく渡ってみると、竣工当初はきつと美しかっただろう光沢感は今や方々にこびりついているゴミ垢でもはや損なわれている。「パッチイナ」と思いながら渡り進むにつれ、無数の黒いシミに混じって小銭サイズのイタズラ書きが散在していることに気がついた。しゃがんで凝視してみると、絵画の体を成しているではないか。

宿に帰ってからネットで調べてみると、それらはベン・ウィルソン氏と「チューイング・ガム男」のアート作品であることを知った。そして、彼の落書き活動が芸術活動として市民から暖かく見守られているのとはより、もつとも驚いたことに、公共事業団から後援さえ受けていることも知った。ここに窺い知れる公共圏のあり方に「ロンドンだよね」とクラッと来た。

（つるもと かおり）

世界一おいしい「日本のコーヒー」 Beeston, Nottingham

ムーディ美穂

夏、イギリスに滞在するとアイスコーヒーがなくて困る。おいしいコーヒーを飲んでも、「ホット」に限り、である。何年か前の話ではあるが、ロンドンではどの店でも「ない」と言われた。リージェントストリートのお店のカフェに入り、ここならば、と期待したが、クリームをかけた甘いものはあっても、ただのアイスコーヒーはないのである。「ブラックに水をいれたもの」と頼むと、親切そうな店員さんが持ってきたのはどろろとしたソフトクリームのようなものだった。スタバでは「作れない」とそつげなく言われた。夏はアイスコーヒーを麦茶のごとくガブ飲みする夫は「なんでそんな簡単なことが……」と、暑さと怒りで湯気を出しながらコップの水をガブ飲みしていたものである。

昨年の夏、縁あって家族でノッティンガム郊外に滞在した。ビーストンという小さな町のささやかなメインストリートを歩いている時、ちよつと休もう、と小さなカフェに入った。大きくとつた窓から日が差し込み、家具は白木のむき出しのテーブルと不揃いの椅子、とそつけないが、日当たりとそこに置かれている観葉植物のおかげで気持ちの良い店内であった。カウンターでそれぞれジュース、マフィンと好きなものを注文する。その時夫がダメもと、といった感じで聞いた。「アイスコーヒーあるかな？」ブラックに水を……、といういつもの台詞を遮って店員さんが言った。「ああ、日本のね。イギリス北部の、しかもビーストンのような小さな町で「日本のコーヒー」に出会えるとは思わず、テーブルに座って「いったい何が出てくるだろう」と楽しみに待った。運ばれてきたのは、「カリタ」とカタカナで書かれたサバーに入ったマギレモない「アイスコーヒー」だった。丁寧に入れられたそのコーヒーはグラスに注ぐと、いい香りがした。よく冷やしてあるが冷た過ぎず、喉を潤し、味わうことができた。その店は地元紙で Best cafe に選ばれたということである。それがビーストンなのかノッティンガムなのか覚えていないが、世界一ではないだろう。でもあの時、一口飲んで思わず目をつぶった夫の顔と、「ダメ、おいしいコーヒーが飲めて良かったね！」と言った子供達の声を思い出すと、私にとっては「世界一」なのである。

(むーでい みほ)

モントリオール 冬の思い出

近藤野里

留学生活の大部分はフランスで過ごしたが、一年間だけカナダのモントリオール大学に留学した。カナダを留学先に選んだのは、小さい頃にオンタリオ州に住んだことがあり、もう一度カナダで暮らしてみたいと思ったからだ。ただし、北米の大学では私の苦手なタイプの言語学理論が主流だといふことをすっかり忘れていて、大変な苦勞を味わうことに。授業についていくのに必死で、四六時中泣くほど勉強した。そのため、モントリオールで遊び歩いた記憶はあまりないものの、冬の思い出は二つある。週末の楽しみとなったのはアイススケートだった。市内にあるラフォンテース公園には大きな人工池があり、冬の間はスケートリンクとして市民に開放される。さらに、定期的に製氷車で整備されるため、綺麗な氷の上を滑ることができる。スケート靴を持っていれば無料で滑ることができる。と知り、アイスホッケー用のスケート靴を購入した。驚いたのは、スケート靴がランニングシューズと同じくらいの値段だったことである。友人がホッケースティックを貸してくれたので、ホッケーの真似事もした。

もう一つの思い出は、メープルシロップ小屋 (Cahane's store) を訪問したことである。メープルシロップの収穫は二月から四月の間で、この時期に郊外のメープルシロップ農家の食堂へ食事に行くと、ケベックの伝統的な食事を取ることができる。ペーコンやスモークハムにメープルシロップがかかったもの、豆のスープ、ミートパイ、豚の耳、メープルパイなどを次々に食べる。その後、雪で作った台の上で温かいメープルシロップを冷やしながら、棒でぐるぐる巻き取って食べるというティールデラップル (英語ではメープルファイヤー) も試してみた。新鮮なメープルシロップの瑞々しい美味しさを味わうことができた。ただし、食事中に大量に摂取したシロップの糖分のせいで、初めてシユガーハイというものも経験した。

(こんどう のり)

Brisbane, Australia: My Second Hometown

Kazuyoshi Sato

Episode 1: On the morning of January 26 in 1995, I arrived in Brisbane for the first time. I reserved a small hotel near the city for one week in order to look for an accommodation near the University of Queensland. After I left my suitcase in the hotel, I went to the university by bus from the city. On my way, I found that most of the shops were closed on that weekday. I just wondered why they were closed on a weekday. The university office was closed, too. I went back to the city and went to a restaurant called “Jo-Jo’s,” which is still located on the second floor of one of the buildings on the main street. After finishing my dinner, suddenly I heard voices of a big crowd outside. They were moving toward the bridge. I paid for my bill and followed the crowd. As we reached the middle of the bridge over the Brisbane River, we saw beautiful fireworks in the night sky. The fireworks continued one after another for about half an hour. Then I learned that it was a national holiday called “Australia Day” to celebrate the anniversary of the first British ships with immigrants in 1788.

Episode 2: The following day, I went to the university to look for information about accommodations. I found several apartment houses where I could share a room with someone. Luckily, I could ask one Australian man, Mr. Barry, to whom I was introduced by my Australian friend before I left Japan, to give me a ride. Barry drove me to several apartment houses near the university. However, none of them were good. Finally, he said to me, “Would you like to come to my house for dinner tonight?” I said, “Yes” and visited his house, which is located in the northern area of Brisbane, about one hour by car. To my surprise, his house was surrounded by mountains. While we were enjoying beer on the veranda overlooking beautiful view, I thought I would love to stay here. I asked Barry, “This is the best house I have ever visited. Can I stay here?” He said, “Yes.”

The following week, we were invited to a barbecue party by his neighbor. The neighbor welcomed me and said, “Do

you like beef steak?” I said, “Yes. But Japanese beef is very expensive, so we usually eat pork or chicken.” Anyway, the beef steak was very nice with beer. After a while, the neighbor said to me, “Yoshi, would you like another one?” I said, “Yes. Aussie beef is very delicious!” Then, after 20 minutes or so, he offered me another steak. By the time I had three steaks, I was almost full. However, I could not say “No, thank you.” To be honest, I ended up eating seven steaks! On that night I had a terrible stomachache. The following morning, my host mother, Shirley, said to me, “Yoshi, you have to say ‘No’ in Australia if you are full. It is not rude.” That was how I learned to say ‘No.’

In summary, I cherish all my memories I had in Brisbane. I still keep in touch with my former Australian host family, Barry and Shirley. After coming back to Japan, I wanted my NUFs students to visit Brisbane and have the same kind of wonderful experiences as I had. I found out that NUFs has three sister universities in the Brisbane area including Australian Catholic University, Griffith University, and University of the Sunshine Coast. That is why I started homestay programs at those universities.

(さとう かずよし)



ホストマザー



ミルウォーキー 様々な出会い

松本純子

私にはほとんど記憶がない。残っている写真を見ることや家族から聞いた話で過去を埋めているようなものだ。だから、ミルウォーキーについても、自分が何をもとにそう「記憶している」のか、はつきりは分からない。私が八歳の時、私たち家族はミルウォーキーで一年弱の時間を過ごした。当時は、今のように日本の街中で西洋人を見掛けることなどほとんどなく、我が家には父の方針でテレビもなかったから、アメリカに行くその時まで、私は西洋人を見たことすらなかった。ことばを一言も理解出来ないまま現地の小学校に放り込まれた時は、さぞやショックだったろうと思う（が、覚えていない）。家族によると、私はある期間、周りのアメリカ人にも私の家族にも理解出来ない、英語の音やリズムを真似ただけの「ことばもどき」を発していたらしい。気が狂ったとも思えるような行動だったようだが、そのお蔭か、やがて私は英語を話すようになった。英語が出来なかつたために、本来なら三年生になる年齢だったにもかかわらず二年生のクラスに入れられたのだが、そのことが、大人になってから、その時の担任の先生とその親友を「アメリカのおばあちゃん」と慕い、生後七か月の子供を会わせに連れて行くまでの関係に発展することに繋がるのだから、人生は不思議である。

「おばあちゃん」達に会いに、成人してからも何度かミルウォーキーを訪れた。ミルウォーキーには大きな動物園があり、彼女達はそこでボランティアをしていて、よく私を連れて行ってくれた。彼女達の仕事が終わるまで園内で自由に時間を過ごしているうちに動物好きになり、シヨップで白熊のTシャツを買ったのが、私が動物のTシャツを着始めるきっかけとなった。

あまり記憶には残っていないなくても、私の中に大きな影響を残した町である。

(まつもと じゅんこ)

ニューカッスル オーストラリア

石田勢津子

三十年ほど前、オーストラリア、ニューカッスル市に十か月ほど滞在した時に、一軒家を借りました。3LDKの家具付きモデルハウスでの生活です。どの部屋も広く、とくにキッチンには豪華でした。ロウでできた果物を入れた籠がダイニングテーブルに鎮座し、大容量の食洗機（洗う食器が少なすぎて使いませんでした）、さらに大きな冷蔵庫（Chesto 並みのスーパード、どっさり買った二リットル入りの牛乳やジュースを入れても一度も満杯になりませんでした）があるといった具合です。週末に食料を大量に買い、家事もできるだけ効率よくするという典型的な欧米スタイルの家だったようです。

使いこなせなかつた家電や家具ですが、気になるものがありました。庭にあつたワイヤーを三連に張った五角形の物干しです。大小の物干しが全部で十五か所です。満艦飾にしたくて、洗濯物をためて干してもせいぜい五か所ぐらいでした。近所の家では、この物干しは結構一杯なのですが、雨が降ろうが、風が吹こうが、洗濯物は乾くまで干しっぱなしなのは感動しました。

もう一つ、コンセントにON/OFFのスイッチがあつたこと。電気を使うたびに一々面倒なことだ、と思っていたのですが、私が無知でした。オーストラリアの電圧は二三〇ボルト、掃除機の吸い込みが物凄く良いのは当たり前、性能の良さではなかつたのです。感電予防のために二重スイッチは、日本では必要ないのかもしれませんが、安全やエコを考えるといいことかも。

異国でのちよつとした生活体験が、帰国してからの我が家の生活にも変化をもたらしました。洗濯物は、雨にもめげず、乾くまでベランダに干したままにすることが多くなり、テールブラトップも二重スイッチになりました。

ニューカッスルは、バスの時刻表などあてにならない car going の街でしたが、日本の常識が当てはまらなくとも、良いと思うところは取り入れていく、それが異文化体験の醍醐味だと思いませんか。

(いしだ せつこ)

ハノイ

史料調査の日々に北朝鮮人と出会う

平山陽洋

二〇〇八年の夏、まだ大学院生だった自分は、ハノイに二週間ほど滞りし、毎日国立図書館に通った。第一次インドシナ戦争期に刊行された書籍や雑誌を閲覧するためである。丁寧に保存されたそれらの図書は、旧宗主国フランスの支配地域とベトナム独立を目指す勢力の支配地域が、状況に応じて範囲を変えつつ入り交じる、戦時下の複雑で流動的な情勢を教えてくれた。

二週間のあいだに、ある興味深い経験をした。大学院で自分を指導くださったっていた先生が、私の帰国前にハノイに来られることになった。先生と私、そして、ハノイに留学中の大学院の後輩の三人で会った際に、最近できたという北朝鮮料理店に行ってみよう、という話になった。北朝鮮が国交のある国に料理店をつくるのは、外貨稼ぎが目的ではないかと話したことや、日本人が行って安全だろうかと話したことを、うっすらと覚えていた。

料理店は、街中の辺鄙な場所に位置するうらぶれた公園のなかにあった。店に入ると電気が消えており、昼間にもかかわらず薄暗い。なにやら普通ではない雰囲気を感じる。三人で椅子に座り、テーブルに置かれたメニューを眺めると、値段は高く、米ドル払いしか受け付けないようである。料理はおいしそうに見える。背が高くスタイルのよいウエイトレスがやってきた。顔は無表情で、ベトナム語でも英語でも話が通じない。身ぶり手ぶりで注文しようとしたが、どうやら、停電で料理を出せないとのことらしい。私たちは店を離れ、公園を出た。

北朝鮮の人間と出会ったのは、自分にとってはじめての経験である。彼女がどういう経緯でハノイに派遣され、うらぶれた公園の料理店で働くにいったったか、その境遇に思いをめぐらせながら、私は図書館での作業に戻った。

(ひらやま あきひろ)



Paris, berceau de mon amour pour le cinéma

Laurent Annequin

Bien qu'étant né et domicilié en banlieue, je me considère plutôt comme un Parisien. En effet, en raison du travail de mes parents, j'ai passé toute mon enfance et fait toute ma scolarité dans la capitale et plus exactement dans le 11^e arrondissement, entre Saint-Maur et le Père-Lachaise.

À Drancy, ville où pourtant je suis né et où j'habitais avant de venir m'installer au Japon, je ne connaissais personne, pas même mes plus proches voisins. Je n'y avais aucune attache ni aucun copain, et « Bonjour » et « Au revoir » étaient le plus souvent les seuls mots que j'utilisais là-bas. Par conséquent, j'étais toujours à Paris, même quand je n'avais pas cours.

La capitale française bien que 3 fois plus petite en superficie que Nagoya offre encore aujourd'hui plus de 400 salles de cinéma. Le mercredi après-midi ou le samedi, avec mes amis, nous allions souvent au *Hollywood Boulevard*, cinéma emblématique des grands boulevards parisiens, malheureusement disparu depuis, qui diffusait les grands films populaires et des séries B. C'est dans ce cinéma de quartier du boulevard Montmartre que j'ai découvert les films de kung-fu et Bruce Lee.

Pour les grands films et les nouveautés, nous allions plutôt dans le quartier de l'Opéra ou au Grand Rex, métro Bonne Nouvelle. *Le Grand Rex* était, et est toujours l'une des plus grandes salles parisiennes avec plus de 2500 places réparties sur 3 niveaux. La projection en Grand Large, sur un écran géant de 300 m² du *Grand Bleu* de Luc Besson reste pour moi un souvenir inoubliable de cette époque. C'est aussi dans ce cinéma, classé monument historique pour sa façade Art-Déco, que l'on organisait des événements comme le *Festival international de Paris du film fantastique* ou plus tard, la *Nuit des Publivores*. C'était dans une ambiance de folie que ces

soirées se déroulaient car le public manifestait spontanément et bruyamment ses émotions. Le spectacle était autant dans la salle que sur l'écran. Mon goût pour le 7^e art est sans aucun doute né à cette époque considérée aujourd'hui par beaucoup comme culte.

Un peu plus tard, quand j'ai commencé à travailler, c'est dans les cafés et les restaurants entre Parmentier et Oberkampf comme le *Troisième Bureau* que se finissaient les soirées théâtre ou café-théâtre du vendredi soir commencées dans le quartier du Marais. Les joutes déjantées sur un ring de boxe ou sur une patinoire de la ligue d'improvisation, dans des salles comme le *Bataclan* m'ont également beaucoup marqué. C'est aussi le début pour moi des salles *MK2* et de son restaurant sur les quais de la Seine, métro Stalingrad, ou du cinéma *La Pagode* dans le 7^e arrondissement avec son jardin japonais et son salon de thé, dont la programmation plus éclectique et centrée sur le cinéma d'auteur a définitivement confirmé ma passion pour le cinéma.

(アスカン ローラン)



巨大映画館 Grand Rex